

新潟教育研究所

平成31年3月8日発行 第40号

公益財団法人 新潟教育会
新潟教育研究所

〒951-8104

新潟市中央区西大畑町590-3
URL <http://kyouikukai.jp>

新潟教育会館

TEL・FAX 025-222-2971

E-mail kenkyujo@kyouikukai.jp

A I時代の 「意志ある学び」

A Iの登場によって、社会の有り様が変わると言われています。今の小学生や中学生が社会人として活躍するころ、「子どもたちの65%は将来、今は存在していない職業に就く」（キャッシュ・デビットソン^{*1}）という予測や「日本の労働人口の49%が就いている職業が10～20年後には人工知能やロボット等で代替え可能になる」（野村総合研究所^{*2}）という現時点では若干現実味のない推計もあります。新しい時代の教育がめざすのは、単なる「学力向上」ではなく、「自ら学び成長する人」「自分なりに試行錯誤したり、多様な他者と協働したりして、新たな価値を生み出していく人」をどう育てるかと言えるでしょう。教育の目的は「新しいよりよい未来をつくる」ことへと進化し、与えられる学びから自ら成長を求める意志ある学び、創造的な学びをいかにプロデュースできるのかが問われます。新たな価値を生み出すようなクリエイティブな教育活動が展開できるようになるために「意志ある学び」をしていかなければならないのは、むしろ教師の方なのかもしれません。

しかし一方で、学校現場は目の前の現実を追われ、未来や新しい時代を語りたくともそんな余裕はないという実情があります。子どもや学校を取り巻く環境の多様化により複雑化・困難化した問題が山積しているにもかかわらず、教員の人数が足りず、働き方改革を迫られてもその改革に使う労力さえも負担でしかないという声も聞こえてき

上越教育大学

佐藤多佳子



ます。教師自身が「意志ある学び」を楽しみ、わくわくしながらクリエイティブな教育活動に夢を抱けるような学校マネジメントはどうしたらよいのでしょうか。

A Iは「目的」さえ与えれば高度な仕事を迅速にします。しかし、自ら「目的」や「課題」を考え出すことはしません。A Iに目的や課題を見つけよという目的を与えるのも人間です。自らの感性や経験に照らして目的や課題を考え出し具体的に行動する、これが出来るのが人間です。教師が自ら目的や課題を考えることや、課題や課題の本質的な所在を見いだし、実現に向けての方策を試行錯誤することを自らの感性と自由な発想で楽しみたいものです。そこには他者との協働やチーム性が必要になるでしょう。また、「ここまで到達せよ」という一定の目標で子どもたちを評価するという発想から解き放たれ、一人ひとりの子どもの学びの姿に価値を見いだし、学びの自覚をフィードバックできるような授業が必要だと考えます。

授業研究発表会等の一番のメリットは、「教師間のコミュニケーションが図られること」であるという研究があります。育てたい子ども像をテーマに掲げるだけでなく、子どもの学びの姿に価値を見いだすための教師のコミュニケーションが授業研究発表会の目標であってもよいはずです。みずみずしい感性と自由な発想で「意志ある学び」を展開する教師間のよいコミュニケーションの向こう側には、子どもの成長があると確信します。

*1 文部科学省2015 産業競争力会議 雇用・人材・教育WG（第4回）資料

*2 https://www.nri.com/-/media/Corporate/jp/Files/PDF/news/newsrelease/cc/2015/151202_1.pdf

総合学習は、教師が地域を 五感で学ぶことから始める

新潟教育研究所 教育アドバイザー

小林 修



〇 はじめに

見附市教育センターに勤め、小・中学校で年間100時間程の授業参観をする。その殆どが国語と算数・数学であり、総合的な学習の時間（以下、総合学習）の授業を見ることは少ない。ただ有り難いことに総合学習の発表を見る機会は多い。それは自分たちの住む地域の暮らし、伝統や文化に興味を持ち、地域のことを真剣に考え合い、地域を誇りに地域の将来の姿を考えた発表である。

1 学びの中核は地域学習

学習指導要領で例示をされた現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題、児童・生徒の興味・関心に基づく課題等の探究課題の中で、私は地域や学校の特色に応じた課題を大事にしたい。

それは総合学習（生活科も）の中核を「地域を学ぶこと」ととらえるからである。子どもは家庭や地域で、学校で生活をしている。子どもの願いを基盤にしながら、生活の場である地域の伝統や歴史、文化、自然を学ぶことは、主体的で協働的な取り組みを生み、地域への愛着と誇り、未来への希望を育む原動力になるとの強い思いがある。

2 地域を誇りに未来に目を向ける姿

昨秋、田井小学校5・6年生が市民に向け総合学習の発表を行った。子どもたちが地域に出かけ、地域の皆さんに関わって学んだ学区の『耳取遺跡』の発表である。この発表は「自分たちの住む田井地区に縄文人が住んでいたよ。」の単なる紹介ではない。遺跡を学ぶ中で「田井のこれから」「未来の田井は」を自分たちで真剣に考え、そのことを市民や行政の皆さんに知ってもらおう発表であった。具体的には「活気あるふるさとになるためには、耳取遺跡資料館や道の駅を作ればいいのか。」の提案やマスコットキャラクター「土器耳土くん」を作り、絵描き歌にしたりキーホルダーを作製し参観者にPRをした。この発表から、

自分たちの地域を真剣に考えた姿をみた。生活科や総合学習等で、地域を学ぶ教育活動はどの学校でも行われているが、決められている活動だから行うのでは意味がない。子どもたちが地域を学び、地域の人やもの等が好きになり、地域を誇りに生活したり、地域の将来について考えたり、関わったりする学びを求めて欲しいものである。

3 教師が地域の「ものしり名人」になる

地域学習では地域の人材と資源の活用に努めることが大切であるが、それ以上に教師自らが地域を歩き、自分の目で町並みの様子や小路の様子、土地利用など校区の隅々までを見て欲しい。

そして五感で地域を感じてもらいたい。私には町探検や地域調査は、五感を通した活動が必要との信念がある。目から入る情報量が多いが、耳や鼻、手や舌等からの情報は、子どもたちにより確かな情報を与え、「あれ？何だろう？」の疑問が生まれ、「それを調べたい」との追求意欲につながる。においや音の情報は、子どもたちの心をつかんで離さないものである。このような探検や調査を行うためには、教師自らが地域を自分で調べ、五感で感じ、そこで得たものが生きた教材になると考える。子どもが持ち込む疑問も知りたいことも、まずは教師が押さえておきたいものだ。

4 保護者・地域人材とともに作る「探究の質」

田村学氏（国学院大）は「総合学習の主体的な学びが新学習指導要領の基盤を築いた。今後は地域と一体になったカリキュラムの開発など、探究の質を高度化していくことが求められる。」と言う。

学びの主役は子どもたちである。子どもたちに寄り添い、高いアンテナで興味・関心に目を向け、そのことを地域人材とともに作る学びが「探究の質」を高めるものになる。さらに学習は、保護者や地域住民も参加する活動を行うことが、より質の高い探究学習が行われるものと確信をする。

教員人生 前期・中期・後期 (後期の巻)

新潟教育研究所 研究員

宮川由美子



はじめに

亥年の始まり、私の周りでは「去年は今頃（雪で）大変だった。」しきり。しかし、県内の豪雪地帯では今年も降りしきる雪の日々であった。県内でもこれだけ意識の差があるのだから、首都圏の人々が本当の意味での雪国の大変さを知らないのは無理もない。でも、決して他人事にしないでと、声を大にして言いたい。

1 あなたの行く道は？

「勧奨退職」なんて言葉が現実味を帯びてくる現役後期。生涯一教師か専門の教科を極めるのか、あるいは管理職か、その道は幾筋にも分かれる。同僚だった〇〇先生は言語通級（言語障害通級指導教室）で熱心に指導に当たっていた。専門的識見の高さに加え人間としての魅力も備わり、頼りになる職員の一人であった。そんな彼に管理職への道をかなりしつこく勧めた。特別支援教育の分野におけるリーダーとして、力量を発揮してくれると確信していたからである。

しかし、返事はいつも決まっていた。「私は、この場所で子供たちを導いていきたい。」分かる、その場所が彼を必要としていることも。

新潟市の新市街である西蒲区に「言語通級」を根付かせてくれた彼の功績は大きい。ただ、欲張りな私は管理職としての彼のやりようも見たかったと、いまだに惜しがっているのである。

2 まっ いいかつ！

連絡帳を見なくちゃ、お便りを書かなくちゃ、テストの採点をしなくちゃ、研究授業の指導案を考えなくちゃ……。ガムじゃあるまいし、くちやくちゃって何よと思われたらどうか。

担任時代の私の姿であり、管理職になっても様々なことに追われ似たような毎日であった。

ある年の夏休み、職員全員でソーシャルスキルに関する研修をしていた。研修内容は残念ながら思い出せないのだが、その時指導をしてくれた〇

〇先生の一言「時には、『まっ いいかつ！』と思うことも大切なんですよ。」が心に染みついて離れない。

全力投球は大切だが、全てをそうすることなどできない。今一番にすることは何か、削ってもいいことは無いだろうか、6～7割ですませることはできないものだろうか。

人間、休むときに休まなければいい仕事ができない。遅ればせながら、教員人生のゴールが見えてきた頃、気付いた私であった。今話題の働き方改革に通じるものがあるかもしれない。

3 人を残し つないでいく

前新潟市教育長で、現在、県女性財団理事長の阿部愛子先生のお話をお聞きする機会があった。

「地域から見る男女共同参画」についての講義であったが、殊更女性寄りではなく教育長時代と同様にバランス感覚にあふれた内容であった。率直で気さくなお人柄が伝わる心地よいひとときであった。「男女共同参画なんて何のことはない、お互いがお互いを思いやればいいのよ。」「自分の中で無意識の偏見がない？」「ワークライフバランスに対する自分の意識は？」小気味よい問いかけが現実の課題を鋭く突いていた。そして、私たちはそれぞれの立場で「人を残し つないでいく」ことを託されているのだというエールを送っていただいた。

おわりに

定年延長がささやかれている昨今、皆さんは教員としての着地点をどこにもっていき、次をどう展開させていくのだろうか。

私は、幸いにも健康にだけは恵まれたので、教育にかかわる場で退職後の数年を過ごさせていただいている。ありがたいことである。

「気力 体力 健康一番 笑顔とともに」自分自身を奮い立たせている言葉であるが、こは、ぜひ、皆さんに届けたい言葉でもある。

聴きあって合わせる力を育てる リコーダー指導をめざして

新潟教育研究所
教育アドバイザー

皆川 昌雄



佐渡市小・中学校教育研究会音楽部の夏季実技研修会にお招きいただいた。11月に行われる全日本リコーダー教育研究大会を視野に入れつつ、リコーダー指導にかかわる実技研修をしたいとのことであった。

今回の実技研修の中心的内容を、聴きあって合わせる力の育成とした。音楽授業のリコーダー合奏で、子どもたちが互いの音を聴き合い、音程を合わせて演奏しているかどうか、集合音の美しさ・和音の美しさに大きくかかわるからである。クラスの大勢の子どもたちが音程に無頓着に吹いていれば、それぞれの音同士のずれが不純なうなりを生み、美しい集合音にはなりえず、美しい和音も生まれえない。息の安定や、曲想表現の工夫等も、それと関連させながらの指導が可能である。

まず、リレーにより、音を聴きあって合わせる練習から始めた。一人一人の聴く力・吹く力を高めるには、クラス全員で一斉に吹くだけの活動では不十分であり、短時間でも一人一人が単独で吹き、それを、しっかりと聴き、合わせて吹く経験をさせるべきだと強調し、リレーによる交互奏の実践を紹介した。参加者全員が児童生徒の立場になって一人一人聴きあい、吹き合った。

次に「風のたより」（橋本龍雄作曲）や「インスブルックよさようなら」（H. イザーク作曲）を教材曲として、聴き合って合わせながら吹く練習をした。4度・5度が正しい音程で吹奏できると、差音が聞こえ、独特のハモった感が体感できることや、純正な5度のなかに3度を低めに入れることで純正な長3和音をめざすことなど、CDやハーモニイデレクターも活用して感じてもらった。

また、「スケルツォ」（B. ブリテン作曲）を教材曲として現代的な和音についても触れた。さらに音程に留意しつつ、CDや歌詞から曲想をとらえて伸びやかに吹くという意味で「花束を君に」（宇多田ヒカル作曲、曾根圭司編曲）の合奏で研修会を終えた。

子どもたちの聴き合って合わせる力を育てるには、その演奏を聴いて確かに評価し、的確に支援する教師の耳が大切である。教師自身が音程に関して耳を鍛えると言っても、幼少時からの精進による絶対音感のことではなく、聴き合って合わせる相対音感のことであり、だれもが努力次第で、その精度を上げていくことが可能である。本研修会もその機会の一つとなれば幸甚と考えている。

教育アドバイザーを要請して

佐渡市立高千小学校 嶋見 靖之



今年、佐渡市で全日本リコーダー教育研究会全国研究大会が開かれ、それに合わせて、市内の教員がリコーダーを用いた音楽授業の研修に取り組みました。一つは授業公開校での授業研究。もう一つは市小・中学校教育研究会音楽部の実技研修。どちらも教育アドバイザーの皆川昌雄先生をお招きしました。

実技研修では、リコーダーの奏法や和音の合わせ方など、主に技能面についてご指導いただきました。「細かい音にも気持ちを投入して」など、先生の助言が心に響く研修でした。